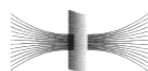


# 品質工学技術戦略研究発表大会について

## ・・ 視 点



毎年秋には、品質工学技術戦略研究発表大会が開催される。この議論は2023年の大会前に実施しており、学会誌への掲載は大会開催後であることをおことわりしておく。

この大会は品質工学会設立16年目を迎えた2008年11月より年1回、毎年11月に開催されている。

毎年6月に開催されている品質工学研究発表大会は春の大会と呼ばれ、品質工学技術戦略研究発表大会は、秋の大会とも呼ばれている。この秋の大会は、田口玄一名誉会長が主張されていた「品質工学の技術戦略」をキーワードに「品質工学をあらためて問う」ことで、品質工学の技術開発での活用を進展させることが狙いにある。

ここで、編集委員会の皆さんと秋の大会の見所や意義について議論したい。

ーこれまで15回の大会が開催されているが、10回以上は参加している。春の大会は、技術の最前線に近い技術者自身の発表が楽しみであるが、秋の大会では、技術開発の本部長や部門長が自らのテーマを深掘りした発表が楽しみである。

ー特に印象に残っているのが、第2回大会（2009）の「PPM時代の品質管理」である。クレームのない良品の特徴量と捉えて、MT法で検査からはじめる流出撲滅は衝撃的であった。

ー第1回大会（2008）の「田口玄一の技術戦略の言説分析」や第5回大会（2012）の「田口玄一の主張とその実践的社内展開の研究」に見られるような田口の残した文献を紐解くような研究が特徴的であり、興味深く感じる。

ー秋の大会は、技術戦略とは、品質工学とは何かを議論ができる場で、可能な限り足を運んでいる。

ー田口は欧米では「技術戦略」と呼ばれ、日本では

「汎用技術」と言われていると、著書「研究開発の戦略（2005）」で述べている。田口の戦略の定義を引用してみると、「広範囲の科学技術分野に共通で、しかも長期に使える機能性の評価方法」となるようだ。

ーこのことは現場のエンジニアにもマネジメントにも共通するものであるものの、立場が異なれば目的や手段も異なってしまうことが多い。田口はエンジニアにテーマを決めさせてはならず、戦略的に決められるマネジメントにテーマ選択を任せるべきで、その目的を達成する手段をエンジニアが考え実行するのが良いと主張していた。

ーそうしたマネジメントから始まる戦略的な品質工学の研究事例が、参加者にとって参考になるであろう。欲を言えばマネジメントの立場とエンジニアの立場、双方から見た事例研究の成果を聞くことが、最も実用性の高い良い発表なのではないだろうか。

ーマネジメントが決めたテーマを実行に移すまでのリソースマネジメントにも、品質工学に特有の課題や解決方法がありそうである。そのような内容も共有されると有意義だと思う。

ー2010年に開催された第3回大会には、「マツダにおける品質工学の展開」の発表がある。また、2022年には「お客様の輝きにつなげるマツダのモノづくり」の発表もあり、企業の方針からの品質工学の流れについて理解ができる。それらと春の大会でのマツダの研究発表を振り返ることで、前述の実用性の高い発表として形作られている。

ー秋の大会と春の大会を組合せて見ることもできるが、2016年はトヨタ自動車、2017年はIHI、そして2018年にはアルプス電気と、各企業のどの部分の取組みに焦点をあて、どのような戦略で活動してきたかを探れるようなマネジメントの発表とその